

# 「意味の隙間の描き方」—未来と現在の接近度、 時制範疇の脱構築、曖昧性と越境性の文法学—

久 部 和 彦

## はじめに

意味の「隙間」を埋めようと試みることは、「隙間があるのではないか」という問いが起こりうる「整理意欲」に紐付けられている。意思疎通の言語ゲームが噛み合わないときに起こる「不足感」が起因となり「隙間」を埋めたい意識化が「現れる」ということを、ヴィトゲンシュタインの高弟ノーマン・マルコムは何度か私に語ったのである。1988/1989 と 1989/1990 の両年度に、ロンドン大学キングスカレッジで毎週水曜日 15 時に開始したマルコムのゼミ形式の授業には、私を含めてロンドン大学のインター・カレッジエイト・システムにより、いくつかのロンドン大学のカレッジに所属する大学院生や内外の研究者(例えば Guy Robinson)が参加していた。ここでマルコムは、研究者や知識階層による「分析趣味」や「ミクロ透視の趣味的なマインド」と必ずしも同義ではないが、それでも、研究者や子を持つ保護者達がしばしば持つ「現場教育力の担い手(学校教育の教員等)」に対する落胆について話題にしたのである。特に、語学教育者と称する職業人には厳しかった。その後、数十年が経ち、状況は、まだ、十分には解消されていない。今も語学教育のフィールド従事者の多くには、「言語透視力への反省的な意識化」や省察が不足したままである。「言語の幅や隙間」といった観念も、同様に、現場には希薄である。本稿は、「意味交換の充足性や不足感」に関する「隙間」を展望(見廻し)する論考である。薄い計量的なデータ提示に走らず、ヴィトゲンシュタイン的な哲学的「展望(Ubersehen)」の手法で、未来と現在の時間の谷間を考えていく。また、同時に、これは、こうした状況を解決するための「コトバの運提供側の研修啓発メモ」としても書かれている。微妙な、未来と現在の移行ゾーンの「隙間埋め」を見ながら、解消法を記述したい。

## 1. 「意味の隙間」と「その描き方」という問題所存への意識化

「意味の隙間の描き方」という題に対し、「確かに、隙間や穴が多いと感じる」といった学ぶ側や教育者からの「同感表明」が多い。何故なのであろうか。ひとつ言えることは、教員や指導者は、「言語の見直し戦略を意識化する」という「問題の所存」には気付いているのである。但し、現状では、「手堅な補正ガイドや持ち駒」はない。これは、我々研究者達が、「隙間」問題への供給力を本格化させてこなかったからなのである。例えば、「未来」と「現在」という二分法では見えにくい「移行性の伸縮幅」を果たして現場の英語教育担当者はしっかり捕捉できているのであろうか。「意識化」は自然には育ちにくい。総じて、「理解の授け手(教員等)」側には、付与順序に関するデザイン力が不足し、「理解の受け手(生徒等)」側には、指示対象や個物の視認ができる名詞概念以外では、消化不良が出やすい傾向が続く。「絵や図・写真」と「文字記号」との「突合せ」を増やし、指示対象と意味の「紐付け」を映像や音声で囲い込んでも、未だ「隙間理解」への改善は困難である。問題は、未来形や前置詞などの「ミクロの隙間」を説明する指導力にある。この問題は、例示の大量投入だけでは乗り切れないのである。fine と good, for と during, below と under の指導には、例示を「絵で描ける」教育力と「概念的な説明力」が不可欠であろう。例えば、「There is a boat-house under the bridge」の場合、橋の下の手元にボートハウスがあり、橋とボートハウスは物理的には「接地」していないが、「接触・接地の<~の下>」を意味する under を使う。「離れた下方」を意味する below は用いない。「パースペクティヴ(川と橋とボートハウスの1枚の絵図)」としての川と橋とボートハウスは「触れ合う」概念図式と「なる」のである。認識のファイリングにあるのは、物理的な接触ではなく、認識傾向性の「中」にある構造透視力である。このような「ミクロを拡大できる言語説明力」が語学指導者にあれば、学ぶ側の物足りなさが解消へ向かうであろう。「事象の記述力への不足感」や「概念の把握力への不足感」は、「ある」のではなく、「つくられている」のである。前置詞指導には、「絵を描かせて」理解を補完させるだけでは不十分で、その構造的な「概念の説明力」という「加算」が、不可欠なのである。

## 2. 未来と現在という二分法では記述しきれない「移行性」の伸縮幅

未来と現在の「移行性」の伸縮幅については「分数的な着地点が多様にある」という想定から発想されている。発表前の梗概にも記したが、母語話者たちの慣用的英文法としての現在進行形は、今現在、物理的・動作的進行が「(顕在的に)見えなくても」、「アレンジメント(認識や約束の共有と調整)」が(事前に)行われていれば、「心の中の意識として」進行性がスタートしているという理解である。現在進行形(be~ing)による内的コミットメントの進行性表出が、調整済みの近未来事態の表現形式としては当然視されていることを確認しておきたい。また、「非常にありそうな事態(to be very likely)」が「計画済の認識表現」に関わる「be going to」と微妙な差異を見出す理由についても注意が必要である。驚くべきことに、「調整(アレンジメント)」がなくても、現在進行形の優先使用はしばしば見かけられる。その多くは「調整の演出」である。表現形式を決めるのは「未来と現在の合流点を切り分ける基準意識」の形成史や理解戦略による可能性にあり、その場合、仕分の基準が心理的なものではなく、何らかの合理性や作戦的な基準により選定されている可能性も高い。「範疇分けの単純化志向」は巻き戻しが要求され、時制範疇指導法の脱構築を要する。「出来事の進行性を表現する場合の起点の記述とは、認識や調整終了以降の時点」という単純化された理解そのものについても再調査が必要になりそうである。

### 3. 未来形と進行形の「事前のアレンジメントと摺り合わせ済みによる意識内進行」

未来形、進行形の用法に見る「母語話者の接近度の範疇」と「接近性意識」についてまず見ていきたい。1つ目は、Will であるが、これは現時点での決定・決断による「意図直後の未来表現」であり「used to express intention at the moment of decision」ということである。これに対して、しばらくしてから「確認」のような場合はもう be going to である。現在進行形 be~ing の場合、特に、二人称や三人称の現在進行形では、意図の有無は伝達しないが、一人称は意図のヒントを含む場合がある。2~3人称現在進行形の「Mike and Tom are meeting tonight」を考えてみよう。これは、アレンジメントがすでに「両当事者間で完全に調整済」である近い未来であり、「蓋然性の余地」は、最早、主題ではない。もし「このうちの1人の片方だけの意図」という状況ならば be going to でもよかったのである。1人称の be~ing では、「I am taking a health check in December」などのように、既にエントリーや申込をしている場合もある。これは「両者の摺り合わせを経た完全なアレンジメント」を複数の主体が接続詞 and を含む「A and B」で複数化している文ではないが、「他との」アレンジメントが内容として前提されており、「予約・申し込み」などは「両者」の片割れが法人等である場合も、基本的に、「両者の完全な合意の「摺り合わせ」は自動的に担保されているため、「摺り合わせ」があるとみなすのである。一方によってオフアーされた「参加申請」にすぎないケースや、「契約色」がゼロで、「両者の合意の縛り」が含意されていない場合などは別であるが、「1人称」でも現在進行形の「摺り合わせ慣用」は、基本的には「あり」なのである。

### 4. 今から見た前と後 - 確認済みで移行中という認識、既に動き出している意識上の進行 -

今より前の時間に既に計画済で、確認が行われている今の時点からみた未来の出来事への言及が be going to のコアである。「移行中の印」ともいえるが、心の中ではスケジューリングを終えて既に動き出している「意識上の進行」であることは明白である。現在進行形 (be~ing) のような「摺り合わせた強い意識」がことさらない状況ならば、通常意図・願望による (今より前の時点での) 調整済未来は be going to でよい。will は「今決めた場合」の定番表現であり、即ち「A form expresses future with intention expresses a future action which will be undertaken by the speaker in accordance with his wishes.」ということである。また、他の誰かとの話し手のアレンジメント (取り決めや調整) がない場合や、それがあらかどうか知らないケースでは、「現在形による未来表現」や「未来進行形 (future continuous) による未来表現」を使う。

### 5. 単純な現在形のままの未来表現法

単純な現在形による未来表現、即ち「The simple present tense used for the future」であるが、これは、より非人格的な場合、つまり、場所、組織、内容などが特定の個人に関係しない場合に、適用される。「The ladies start business on this coming Sunday」などである。これは、明確な、はっきりとした未来の配置・配列・取り決め(アレンジメント)による用法であり、「Used with a time expression for a definite future arrangement」ということである。「The ladies are starting business」のような現在進行形ではなく単純な現在形のままの未来表現でよい。「I leave tonight」は、これは計画 (Plan) の一部 (part) で、必ずしも「私」によって決められたものではないリーヴであり、「I am leaving tonight」(今夜、離れることを決めた、ということをはめかすこと (imply that I have decided to leave) とは全く異なる背景知の含意がある。ともあれ、全体的に、現在形のままの未来表現法というものは、進行形より「more formal」(更にフォーマル) であるという観点があり、このことはイギリスでも文法指導でしばしば強調されている。最終的に、もっとも強調したいことは、次のようなことである。即ち、現在形のまま未来を語る用例は、「自発性マインド」の有無や、受動的必要性認識が含まれるため、ケース別の全体論的な状況による相対性が強まることになる。我々は、限られた例示のみでこれを一般化し教えることについて、非常に危険で困難である領域であることを認識すべきであろう。

### 6. 「配線構造 (経験の総体を経た判断傾向性)」こそが表現形態の選択には深く関係している

結局のところ、「現在形」での未来表現を選ばせた文法形式の選択とは、「心の集大成」を経た「捉え方の意思表示」の顕在化でもある。「したいからする」のではなく「意思とは関係なくそうなる」という受動表明から「I leave tonight」は出てくる。自らの意思が前面に出た構文選択では will に代表される意志未来や、決め事の認識表明としての be going to があるが、これらとは対極にある「自己の裁量が消えた未来行為」が現在形の未来表現用法には多いのである。自動到達未来を黙示的に知らせる「自動到達の shall」を思い起こしてほしい。I shall be 20 tomorrow は「私は (自動的に) 明日 20 歳になる」(自分が欲するのではなくても) という用法である。それでも、この表現を発するマインドには「私は 20 歳になるの! (という喜びの感情)」を「表情」で付加することも可能で、その「混ざり合い」はゼロではないのである。こうした微妙な「交じり合う意味カラー」については、文字表現と非言語の「表情」等に関する「融合像採集」を積み上げるしかない。VTR 撮影を増やし、そのフィールドワークをイギリスなどで増やす以外にない。最終的には、その調査力と展望力が言語教育のミクロなネックを解決する。英語教育高度化への、「透視力」や「調査力」を付与できる研究変容の投下が、今、強く望まれている。

主要参考文献：

Wittgenstein, L. *Zettel* Oxford: Basil Blackwell

Wittgenstein, L. *Philosophical Investigations* Oxford: Basil Blackwell